

Jane Austen の教育観について

野村ヒサ

(1)

Jane Austen の作品は全部教育についてであると言え、いささか極論になるかもしれないが、彼女の完結作品が、そのヒロイン達の「教育」(道徳性を培い、洞察力を涵養するという意味の)がテーマになっていることは事実である。その事実を明らかにするまえに、Austen 自身が受けた教育と、当時の(特に女子の)学校教育についての彼女の考え方を少し考察してみたい。

Jane Austen は6歳の時、3歳年上の姉といっしょに Oxford の寄宿学校に入り、その後 Southampton に移ったが、そこで2人ともチブスにかかって危うく死にそうになり、いったん家に帰ったが、再び Reading の Abbey School に入学した。その学校に父 George Austen が1785年8月、1786年2月、1787年1月に授業料を納入しているから¹⁾、彼女が家に帰ったのは11歳の頃らしい。その後の教育は、父母と5人の兄達と1人の姉に任された。父 George Austen は Oxford の St. John's College 出身の牧師で、知人の息子たちの教育もしていた。兄達のうち2人は Oxford の St. John's College を出ており、3番目の兄は富裕な親戚の養子となったので grand tour に出た。5番目の兄と弟は Royal Naval Academy にそれぞれ12歳の時に入学した。当時としては珍らしいほどの高い学歴を持った家族たちに囲まれて育った Jane Austen が、学校教育について否定的な考え方を持ってい

たことに皮肉な感じを受けるのは、筆者ばかりではあるまい。

Emma の中で Austen は女子の学校教育を . . . reasonable quantity of accomplishments were sold at a reasonable price, and where girls might be sent to be out of the way, and scramble themselves into a little education, without any danger of coming back prodigies.²⁾

と皮肉っているが、彼女自身は16歳になる前に“*The History of England*”³⁾を書いたりしているのだから充分に prodigious であったと考えられる。

Austen の女子学校批判は、主に seminary とか establishment とかいう名で呼ばれていた寄宿学校にむけられ、若い女性達の虚栄心が強くなるだけだと言っている。

. . . young ladies for enormous pay might be screwed out of health and into vanity . . .⁴⁾

Austen が女子の学校教育の弊害と考えていた vanity (虚栄心) は家庭内においても(つまり家庭教師による教育を受けていても)身につけてしまうことがあり得た。例えば *Mansfield Park* の中で Maria Bertram が、自分と同じ年頃の従妹 Fanny と自分を比較して、自慢げに話す場面がある。

“The Roman emperors as low as Severus ; besides a great deal of the Heathen Mythology, and all the Metals, Semi-Metals, Planets, and distinguished philosophers.”⁵⁾

当時女子教育は17歳ぐらいで終るものと決まっていたらしく、同じ *Mansfield Park* の中

で、Norris 夫人に、まだ学ぶべきことが沢山あると言われて、Maria は

'Yes, I know there is, till I am seventeen.'
と答えている。

審美教育について、Austen は

... a period of twelve years had been dedicated to the acquirement of accomplishments which were now to be displayed and in a few years entirely neglected. . . those years which ought to have been spent in the attainment of useful knowledge and mental improvement, had been all bestowed in learning drawing, Italian and music.⁷⁾

と述べて軽蔑している。

Northanger Abbey (23歳頃の作品) の中で

To come with a well-informed mind, is to come with an inability of administering to the vanity of others, which a sensible person would always wish to avoid. A woman especially, if she have the misfortune of knowing anything, should conceal it as well as she can.⁸⁾

という個所がある。つまり女性は、たとえ理想的な教育を受けても、男性に比べれば劣るものであり、女性はその学識をなるべく包み隠しているべきである、というのである。

晩年に書かれた *Persuasion* では人間性の探求を最高のものとする考え方に変わって来たと考えられるのが興味深い。

Hers is a line for seeing human nature ; and she has a fund of good sense and observation which, as a companion, make her infinitely superior to thousands of those who having only received 'the best education in the world', know nothing worth attending to.⁹⁾

(2)

Education という語は Austen の時代には

現代とは少し違う解釈がなされていたようである。

Samuel Johnson (1709-1784) は Austen が愛読した人々のうちの1人であるが、その大著 *A Dictionary of The English Language* によれば、Education は

'Formation of manners in youth ; the manner of breeding, youth ; nurture.

となっており、Richard Hooker の *Of The Laws of Ecclesiastical Polity*¹⁰⁾ から次のような用例が挙げられている。

Education and instruction are the means, the one by use, the other by precept, to make our natural faculty of reason both the better and sooner to judge rightly between truth and error, good and evil. R. Hooker, book I ch VI - (5)

つまり当時の教育というのは、学問よりも行儀作法を身につけさせることであり善悪の正しい判断を可能にさせることであった。2番目の用例は Swift からで

All nations have agreed in the necessity of a strict *education* which consisted in the observance of moral duties.

道徳性の涵養に重きがおかれていたのである。

John Locke の *Some Thoughts Concerning Education*¹¹⁾ は1693年に出版され、その存命中に4版を重ね1777年までに25版を出版し

(Austen は1775年生まれ)、彼は当時の英国では最も主流をなす教育学者であった。

Austen が John Locke の影響をうけたことは確かで、Locke が彼女の小説に見られる教育観に何らかの光明を投げかけたと考えてよさそうである。

John Locke によれば、教育の4大目的は *virtue, wisdom, breeding, and learning* の順序で並べられている。今日と全く逆の順序であると言える。

(3)

John Locke は S.T.C.E. の中で自分の受けた学校教育 (Westminster School という名の Public school) を批判し、家庭教師による教育は子供を世間知らずにする弊害はあるにせよ、学校教育では得られない徳性を身につけることを可能にするとし、この徳性を養うことこそ教育における根本的に重要な目標であると論じている。Austen も徳育を重視し、学校教育を徳性を養うには有害無益であるとして軽蔑し、個人教授によってのみ真の教育は達成されると考えていたようである。それは Austen の小説中、学校教育を受けた人物たちは (ごく少数の例外を除いて) 全部徳性や洞察力が欠如しているからである。*Pride and Prejudice* の Mr. Collins や *Bingley* の妹達をはじめ *Sense and Sensibility* の Robert Ferrars, *Northanger Abbey* の John Thorp 等校挙にいとまがない。

知育より徳育を重視し、人格教育を理想とした Locke の考え方を Austen はいく分誇張し、知育を殊更に軽蔑したと見られる個所さえ見受けられる。*Mansfield Park* のヒロイン Fanny Price は時として非常に無知である。

(しかしこの無知とやさしい心とは Austen のヒロインにおいては表裏一体の要素であり、これがその道德的発達に寄与していることも事実である)。

John Locke は、子供の徳育のためには、家庭教師と両親を含む家族全員が関与すると考えていたが、Austen のヒロイン達の道德教育は、両親よりもむしろ友人、兄弟、姉妹との相互関係に依存していたようである。ヒロイン達の親は *Pride and Prejudice* を除いて死んでしまっているとか、生きていても不在であるとか、彼女たちとは離れている。このような親達の取扱いは、ヒロイン達の気質の形

成の際の親ゆずりの物との関わりを意図的に減じようとしたことの表われであると考えてもよからう。D. D. Devlin はこのことについて、教育を含め環境要因を高く評価した John Locke の教育論を Austen が発展させたことの裏付けであると説明している¹²⁾。

Austen の小説のヒロイン達は環境の壁を突き破って自由な精神状態を獲得するに至るのだが、そのためには愛情が不可欠であり、愛情のみが人間を精神的自由へと導き得るものとしているように考えられる。

Austen の描くヒロイン達にとっての「教育」とは幻想から教知への移行であり (これは初期の作品のテーマとなっている) その目標は、事物をあるがままに自由な曇りない眼で見ずえることを可能にすることであった。

この「教育」という語によって説明される事柄の内容は、すでに覚醒とか現実認識とかいう言葉によって言い古されて来た一般的解釈の趣向をかえた焼き直しのようにも考えられる。しかし11歳以後はほとんど独学に近かったこの女流作家にとって、「教育」とは、社会の健全な価値観を取り込みながら認識能力を育成していくことであった。そしてこの self-education の目標が徳性の涵養であったと言えるのではあるまいか。

(4)

D. D. Devlin によれば「教育」とは、洞察力を養い、それを通して自由なよりよい人間へと成長していく長い困難なプロセスである。しかしこの洞察力を身につけることが、必ずしもヒロインの幸福につながるとは限らない。とは言ってもその洞察力なしには、真の幸福はあり得ないということを Austen はヒロイン達に気付かせているのである。ヒロインのこのつらい「開眼」が各小説のクライマックスになっていることが多い。

Narthanger Abbey のヒロイン Catherine は、Tilney 将軍が妻の死に責任があると思込んでいる（これは恐怖小説の読み過ぎからなのであるが）。そのことを Henry に静かにさとされて眼がさめる。この経験から彼女は取り返しのつかないことをしてしまったという激しい後悔の念にさいなまれる。

The visions of romance was over. Catherine was completely awakened. Henry's address, short as it had been, had more thoroughly opened her eyes to the extravagance of her late fancies than all their several disappointments had done.

It was not only with herself that she was sunk, but with Henry. He folly, which now seemed even criminal, was all exposed to him, and he must despise her for ever. ... She did not learn either to forget or defend the past; but she learned to hope that it would never transpire farther, and that it might not cost her Henry's entire regard.¹³⁾

前に述べたように、教育には愛が不可欠であると考えられるが、このエピソードでは Henry と Catherine は愛し合いはじめていたのでそれが原因となって洞察力が生まれ、彼女は自分やまわりの人々の真の姿を客観的に眺められるようになるのである。

Pride and Prejudice のヒロイン Elizabeth は小説の前半では自分が Darcy に愛情を抱きはじめていることに全然気付いていない。Darcy の結婚申込を拒絶する彼女の手紙に対して Darcy が再び出した返事によって彼女はやっと気が付く。やはり、はげしい後悔の念と共にである、

'How despicably have I acted!' she cried—'I, who have prided myself on my discernment!—I, who have valued myself on my abilities! who have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity,

in useless or blameable distrust. — How humiliating is this discovery! — Yet, how just a humiliation! — Had I been in love, I could not have been more wretchedly blind.'¹⁴⁾

以上二つの例にはヒロインの開眼に伴う苦痛が明確に語られ、効果を發揮している。

Mansfield Park は Austen の後期の作品であり、教育についての最も深遠な論考であるといわれている¹⁵⁾。(事実 Austen はヒロインの判断に至るプロセスを劇化し、彼女たちとの関係を通じて読者を作品の中へ引き入れるのは、Austen の後期の作品においてのみである。) ヒロインに生彩が欠けると評する人もあるときくが、私はこの作品こそ Austen が自己の思想を作品に移しかえる名人であったことの絶好の証拠となるものであると信じた。

Mansfield Park のヒロイン Fanny Price は理性的ではないが、強い正義感と、一種の鋭い勘のようなものをはじめから持ち合わせている。明確な判断力を学ばねばならないのはむしろヒーローの Edmund とその父 Sir Thomas である。

He saw how ill he had judged, in expecting to counteract what was wrong in Mrs. Norris, by its reverse in himself; clearly saw that he had but increased the evil, by teaching them to repress their spirits in his presense as to make their real disposition unknown to him, and sending them for all their indulgences to a person who had been able to attach them only by the blindness of her affection, and the excess of her praise.¹⁶⁾

つまりこの作品においては、苦い後悔の念とともに開眼するのはヒロインの保護者である Sir Thomas なのである。

Austen の最後の作品 *Persuasion* のヒロイン Anne Elliot はこの小説全体を通じて明確な洞察力を持っている。そのため、他の作品

のヒロイン達とは出発点が異っている。彼女はこの物語が始まる前に「教育」のつらい過程を経験してしまっているからである。

(5)

John Locke は、親や家庭教師が子供に忍耐を教え込む一方で、子供の精神を自由闊達に保つ配慮が必要であると論じ、教育と自由の不可分なことを説いた。Austen もまた、人間は熱情を克服し善による拘束をうけている時（つまり真の意味で教育を受けておる時）実は、最も自由であると考えていたと思われる。そしてこの自由の問題が Jane Austen 文学の核心を形成している。

Mansfield Park はあらゆる種類の改良 (improvement) についての皮肉であるとも評されているが（事実、この時代は 'improvement' についての論議は非常に盛であったらしく、B. C. Southam はその論文 *Sanditon ; the Seventh Novel*¹⁷⁾ の中でこのことに触れている。）作品中でも Mr. Rushworth は自分の邸園を莫大な費用をかけて 'improve' させはじめたりしている。また、小説の進行に伴って、ヒロイン Fanny の重要性は徐々に 'improve' して行き、終わりには Sir Thomas の重要さと逆転してしまう。つまり知識の量と道徳性とは必ずしも正比例の関係にあるわけではないという Austen の皮肉な教育観が *Mansfield Park* にこめられている。

自由の問題が Austen 文学の核心を形成していると考えられるということは前にも述べたが、*Mansfield Park* の中でのその問題の取扱いについて考察してみたい。

(6)

前にも述べた通り、*Mansfield Park* はヒロイン Fanny Price が居候という最低の身分か

ら Bertram 家の重要人物となるまでのいわば、出世物語である。Fanny がこの小説にはじめて登場する時には、憶病なめそめそした弱々しい少女で Bertram 家の奥方の親戚から口べらしのために Mansfield 邸園へもらわれて来た無知な田舎者である。それが小説の終には家中の誰からも必要とされる重要な人物となっているのである。この地位の逆転にこの小説の劇的な皮肉と特殊性があると言えよう。

第一章は、いきなり、持参金たった7000ポンドで Maria Ward 嬢が幸運にもマンスフィールドパークの従男爵夫人におさまったという文で始まる。経済的な裏付けなしでは人生はやっていけないが、愛のない結婚は道義に反するというのが Austen の一貫した考えであった。Bertram 夫人の姉は、それから6年も後になってやっと結婚相手が見つかる。相手の Norris 氏は Sir Thomas の友人で、これといった財産のない聖職者であった。この縁組は *Pride and Prejudice* の Charlotte Lucas が Mr. Collins（これも聖職者）との結婚を承諾する場合とよく似ている。Charlotte にとって、愛ある結婚をする自由が経済的理由のために、なくなって来ているのに対し、*Mansfield Park* の登場人物たちはその徳育に欠陥があったため望ましい結婚をする自由がないということであろう。

自由の問題はこの小説の大きな論点の一つで、冒頭から提起されているわけである。Norris 夫人は生活（お金）のために結婚したが、Sir Thomas も後に同じような結婚を Fanny に強いることになる。Norris 夫人は世話好きだが己れを知る心に欠けている。この小説の登場人物たちの多くにも、この反省心の欠如ということが言える。

Sir Thomas は教育について自分なりの考え（残念ながら間違っているのだが）を持っていて、早くも第一章でこの教育に関する問

題は提起される。すなわち人間を善に導くには何がなされるべきか、人の教育のためにはどんな要因が最も重要かという問題である。

'Should her disposition be really bad,' said Sir Tomas,' we must not, for our own children's sake, continue her in the family ; but there is no reason to expect so great an evil. We shall probably see much to wish altered in her, and must prepare ourselves for gross ignorance, some meanness of opinions, and very distressing vulgarity of manner ; but these are not incurable faults ; nor, I trust, can they be dangerous for her associates. Had my daughters been *younger* than herself, I should have considered the introduction of such a companion as a matter of very serious moment ; but as it is, I hope there can be nothing to fear for *them*, and everything to hope for *her*, from the association.'

'That is exactly what I think, cried Mrs. Norris,' and what I was saying to my husband this morning. It will be an education for the child, said I, only being with her cousins ; if Miss Lee taught her nothing, she would learn to be good and clever from *them*.'

'I hope she will not tease my poor pug,' said Lady Bertram ; 'I hope but just got Julia to leave it alone.'

'There will be some difficulty in our way, Mrs. Norris,' observed Sir Thomas, 'as to the distinction proper to be made between the girls as they grow up : how to preserve in the minds of my *daughters* the consciousness of what they are, without making them think too lowly of their cousin ; and how, without depressing her spirits too far, to make remember that she is not a *Miss Bertram*. I should wish to see them very good friends, and would, on no account, authorise in my girls

the smallest degree of arrogance towards their relation ; but still they cannot be equals. Their rank, fortune, rights, and expectations, will always be different. It is a point of great delicacy, and you must assist us in our endeavours to choose exactly the right line of conduct.' (Ch. I)

行間に Austen の皮肉が感じられる。Sir Thomas の教育観も明らかになる。

第二章では、ヒロインの Fanny (その時10歳) が Norris 夫人といっしょに Mansfield Park (叔母の嫁入り先) に到着する。彼女は弱々しく、年の割に小柄で顔色もよくない。おどおどしてひどいホームシックになっている。数日経ったある朝、Sir Thomas の次男、Edmund は Fanny が屋根裏部屋へ通じる階段の上で泣いているのを見つけ、親切にいろいろ教えてやる。Bertram 家の者たちの中でこの Edmund だけが Fanny とあたたかい人間的な接触を持つようになる。(Sir Thomas もその娘たちも Fanny に悪意を持っているわけではないが、ないがしろにしたり軽蔑したりはする。) Fanny もまた Edmund を自分の血をわけた兄 William の次に好きになる。人の人に対する真に人間的な心づかい(すなわち愛情)が存在する場合にのみ徳育が可能であるということはすでに述べたが、Fanny の徳育が成功するのはこの Edmund とのかかわりあいがあずかって大きな力となっている。

第四章の Bertram 嬢たちの評判について述べた個所では

The Miss Bertrams were fully established among the belles of the neighbourhood ; and as they joined to beauty and brilliant acquirements, a manner naturally easy, and carefully formed to general civility and obligingness, they possessed its favour as well as its admiration. Their vanity was in such a good

order, that they seemed to be quite free from it, and gave themselves no airs ; while the praises attending such behaviour, secured and brought round by their aunt, served to strengthen them in believing that they had no faults. (Ch. 4)

'carefully formed' とか 'good order' とか 'gave themselves no airs' とかいう表現が彼女達の受けた教育がうわべだけの訓練（社交的な虚飾、意識的な抑制）であったことを示している。Austen はこの種の訓練を軽んじているわけではないが、読者は、後でうわべの抑制がきかなくなった時、この種の訓練がいかに無力なものであるかを思い知らされることになる。

この小説の中で再三取扱われる結婚は、徳育の問題の提起となっている。人がどんな結婚をするかによってその人の気質や性格が評価される。つまり徳育の試金石のような役割を果たしているのである。

Sir Thomas の長女 Maria は Rushworth と結婚すれば父より収入の多い家の人となれるし、その上ロンドンに家を持てると楽しみにしている（第4章）。(Austen は兄が London の Hans place に住んでいたので1811年から1816年まで毎年 London に滞在していたし、1813年には London の Covent Garden に数ヶ月間住んでいた。)¹⁸⁾ London はこの小説の中では、根無し草の性質と放縦とを象徴している。Maria は自由というものを外面的な束縛からの逃避と解釈しているが、彼女のその態度がはっきり表われるのは第21章になってからである。Maria は Mansfield Park から逃れたいと望んだが、Fanny はその Mansfield Park とその中にあるすべての物にいとおいしさを感じている。(皮肉にもその中に住んでいる人に好ましい感情を抱いているのではない。) Fanny は Sir Thomas には恐怖を感じ、Norris 夫人にはいびられ通して、びくびく

はらはらし通してであった。

Mansfield Park は London に対して country house (英国貴族の田舎にある本邸) の真の価値と (都会に比べて) 豪華な生活習慣や儀式を代表していると考えられるが (中味も含めて) その大邸宅は崩壊の危機に瀕している。また、Mr. Rushworth の邸園のある Southerton では、邸内の礼拝堂はもはや朝の礼拝に使われなくなってしまっている。L. C. Knights のいう 'it maks a moment of great Importance in the changing consciousness of the civilization to which it belongs' であろうか。

Austen は血統とか伝統とかを高く評価していない。彼女は伝統的な信念を受けつぐということは不可能なことだと考えていたようである。Edmund を除く Bertram 家の者たちは、環境と、間違った教育との犠牲者である。しかし、この小説の終りまでには部外者たちは次々に去って行き、Mansfield Park の根本的な欠陥が明らかになり、直されることになる。

この小説の舞台に最初に登場する部外者は Crawford 兄妹である。(第4章) 読者が彼等について最初に得る情報は、その望ましからざる環境と教育である。London の叔父夫婦に溺愛されて育った Crawford 兄妹は、叔母が死ぬと自宅に妾を引き入れた叔父に失望してその家を出る。Crawford 兄妹はこの小説の中で、Fanny に次ぐ重要人物である。この二人の取扱いについてはとかくの意見がある。Mary Crawford があまりに魅力的に、Henry Crawford があまりに完璧な紳士に描かれ過ぎていているというのである。実際、Mary Crawford は多くの美点を持っている。気さくで親切で機知がありしかも美人である。彼女が姉 Mrs. Grant と結婚について話し合う場面によると、Mary は結婚とは、先ず経済的な取り決めであるという見解を持っている。

彼女にとって結婚とは欺くこと (take-in) なのである。どうせ欺くなら好ましい経済的条件の人がよい。Tom Bertram (Sir Thomas の長男) は丁度その条件にぴったりのようである。

Tom Bertram must have been thought pleasant, indeed, at any rate, he was the sort of youngman to be generally liked ; his agreeableness was of the kind to be oftener found agreeable than some endowments of a higher stamp, for he had easy manners, excellent spirits, a large acquaintance, and a great deal to say ; and the reversion of Mansfield Park, and a baronetcy, did no harm to all this. Miss Crawford soon felt that he and his situation might do. She looked about her with due consideration, and found almost everything in his favour, a park, a real park five miles round, a spacious modern-built house, so well placed and well screened as to deserve to be in any collection of engravings of gentlemen's seats in the kingdom, and wanting only to be completely new furnished — pleasant sisters, a quiet mother, and an agreeable man himself — with the advantage of being tied up from much gaming at present, by a promise to his father, and of being Sir Thomas hereafter. It might do very well : she believed she should accept him ; and she began accordingly to interest herself a little about the horse which he had to run at the B — races. (Ch. 5)

冷然とした調子が Mary Crawford の皮肉な結婚観ばかりでなく、それに対する Austen の批評をも物語っているようである。

Mary Crawford が Bertram 家の息子たちとはじめて話をかわす時、その話題は Fanny が社交会にデビューしてしまっているかどうかについてである。Mary は (人間の本质と

はかけ離れた) エチケットの枝葉末節にとられすぎている。Mary が何度も使っている manners (礼儀作法) という語はこの小説の中でかなりしばしば使われる。このあたりだけでなく、Austen は小説全体にわたって、Mary の話し振りに一種のわざとらしい調子を帯びさせているという感じをうける。わざと明るく振舞おうとして落着きをなくしてしまったような感じを出して Mary の精神的欠陥を表現することに成功している。Austen の筆の冴えと言えよう。

Mary は自分が自由な新しい女性だと自負している。彼女はこの小説の始めから終わりまで華やかにしゃべり魅力をふりまいて動き回るのだが、自分の自由が実体のないものであることに気付いていない。彼女は自分の育ちと環境 (自分でも蔑んでいる) の制約を受けている。Mary はこの小説の中で Edmund との結婚という自由を獲得出来ないままに終わる。第37章で Austen は Mary について実に正確に

... a mind led astray and bewildered, and without any suspicion of being so ; darkened, yet fancying itself light.

と述べている。

この小説の終りには、Mansfield Park はその拘束力を失ってしまい、人々は自由に判断し振舞うようになっている。自由というテーマの取扱いについて、Austen は巧みであったとは言えないと思うが、この小説の中で、環境の及ぼす望ましくない力をも、人は努力によって打破することが出来るのだということを示唆することには成功していると言えよう。

この小説は大きく2つの部分に区分することが出来、その部分のそれぞれに2つずつの主要な事件がある。この4つの事件においてヒロインの Fanny はその渦中にある。読者は Fanny の意識を通してあらゆることを見

聞きすることになる。前半の2つの事件では彼女は積極的な役割は演じない。(Fanny は社交界へのデビューは未だ済ませていない。) Fanny が自分の価値を確立し、その重要性を徐々に増していく様子は23章で Sir Thomas が馬車をまわしてやる場面とか、彼女のために舞踏会を開催してやり、その皮切りを Fanny にするべきだと主張する場面とかに鮮やかに物語られている。

Sir Thomas は第3章の終りで Antigua へ旅立つことになる。これは外部からの拘束が取払われた時、Bertram 家の娘たちやその他の人々がどんな振舞をするかを読者に見せるための筋書きであろう。小説の前半では Fanny はいつも公平な傍観者であり、時には親切な聞き手であることもある。彼女はあまり口数も多くないし、若い人達の騒ぎをじっと見守っていることが多い。 Lover's Vows のリハーサルの中で生じた恋愛ごっこでも Fanny はものしずかな聞き手である。 Mansfield Park の中で彼女の部屋は、Bertram 家の人々の部屋とは離れた White Attic (屋根裏部屋) とか East Room で、大抵はひとりぼっちである。人といっしょにいる時でもあまり活発に動き回ることはいない。

Sotherton 行きのエピソードはおそらく Austen の筆の冴えが一つの頂点に達した現われであろう。 Edmund Wilson はこの小説を読んだ時の喜びを30年後に思い出して in the focusing of the complex group through the ingenuous eyes of Fanny, the balance and the harmony of the handling of the contrasting timbers of the characters.¹⁹⁾ と言っている。

第9章の Sotherton 行きは、Sir Thomas の束縛から自由になった若い人々の本性がはじめてあらわれて来るシーンである。一行は邸内をひと回りして礼拝堂へやって来る。以前は朝夕の礼拝にいつも使われていたものであ

る。しかし故 Rushworth 氏がその習慣をやめてしまったのだった。捨てて顧みられなくなった礼拝堂はそのまま生活の質的衰微と伝統的水準の放棄とを物語っている。その後そぞろ歩きをしながら Mary と Edmund は聖職者の価値と影響について議論する。Mary の 'a clergyman is nothing . . . he cannot fashion the manners of a large congregation.' という言葉に対し、Edmund は

'And with regard to their influencing public manners Miss Grawford must not misunderstand me, or suppose I mean to call them the arbiters of good breeding, the regulators of refinement and courtesy, the masters of the ceremonies of life. The manners I speak of might rather be called *conduct*, perhaps, the result of good principles; the effect, in short, of those doctrines which it is their duty to teach and recommend.' (Ch. 11) と反対意見を述べる。この一節には聖職についての2人の意見の対立ばかりでなく manners についての2つの明確に異った解釈が記されている。この 'manners' の2つの解釈の衝突は他にも多くの場面に見られる。例えば第15章で Edmund が Maria に芝居 (Lover's Vows) に参加しない方がいいと注告する場面でも、'manners' を社交的な優雅さ、つまり「洗練」と解釈する Maria が正しい道義の結果としての品行と解釈する Edmund を言い負かしてしまう。

Austen の他の小説ではこれほど執拗にこの問題を追求していない。 Mansfield Park という小説の強力な示唆力はこの捕え所のないそれでいて絶え間のない説教的な雰囲気の原因があると言えないであろうか。

第10章では、Sotherton の邸園内のベンチに Fanny と Edmund と Mary が腰かけて、から堀を見下している。Fanny が静かに腰かけているのに、他の人はあちこち歩き回る。

先ず Mary が「じっとしていると疲れますわ。」と言って動き出す。Fanny をひとりベンチに残したまま、Edmund と Mary が連れだって行ってしまうと20分ほどして Maria Bertram, Mr. Rushworth (この二人は婚約者同士である。) とそれに Henry Crawford が現われる。Maria は鉄の門に気が付いて、それを通りぬけて邸園の中へ入って行きたいと言い出す。門には鍵がかかっている、Mr. Rushworth が鍵を取りに行かされる。Maria と Henry は一寸戯れの言葉を交わし Fanny の反対に2人は耳も貸さず連れだって行ってしまふ。再び Fanny はひとりぼっちで取り残される。控え目だが性行為の示唆が巧みになされ「鍵」の象徴的な意義の重大性を読者は感じる。我々は彼女がから堀に滑り落ちる危機に瀕していることから大きな不幸の瀬戸際に立っていることを想像する。この事件そのものは小さいが、この小説の終の Maria の駆落ちを示唆していると言えそうである。次に Julia が来て又行ってしまふ。その後 Mr. Rushworth が鍵を持って息を切らせてやって来るが、また立ち去る。終りに再び Edmund と Mary がもどって来る。(はじめ2人が立ち去ってから1時間経っている。) 多くの人物たちのこのシーンへの登場と退場は、この小説全体の進展や筋書きのミニチュア的な表現である。つまり Fanny がじっと座っていると、そのまわりを皆が空しく動き回り、徐々に感情に支配され操り人形のように見えはじめる。実際、小説が進行するにつれて波瀾がますます気狂いじみて来て Julia は Tom Yates と駆け落ちするし、Maria は Henry Crawford と情を通じるが、Fanny だけはじっともとのままである(丁度あの Southerton のベンチに腰かけていた時のように)。つまり Fanny だけが感情に支配されることなく自由なままでいるわけである。

第二の事件、'Lover's Vows' の素人芝居の

エピソードでもまた、Fanny は若い人々の一団とは少し距離をおいている。このエピソードはいわば Austen の2回目の公開実験とも言うべきもので Bertram 家の若者たちが鬼 (Sir Thomas) の居ぬ間に何をするかを見せてくれる。素人芝居は一同の虚栄と愚かさを浮き彫りにする。見守っているうちに若者たちの本性が見えてくる。はじめのうち反対していた Edmund までついには愚かな行動に巻き込まれてしまふ。リハーサルが Sir Thomas の突然の帰国によって中止になった時、Henry と Maria との戯れの恋も終りになる。Maria は突然 Rushworth 氏と結婚する気になる。(しかしその結婚も Henry と Maria の不義の防止には役立たない。) Edmund によれば芝居をしていた時は 'a period of general folly' なのであり Tom Bertram によれば 'by all the dangerous intimacy of his unjustifiable theatre' なのである。

Sir Thomas にとって自分の留守に素人芝居が演じられたという事実が気に入らないのではなく、この 'Lover's Vows' という芝居そのものが気に入らないのである。

若い人々をはじめのうちは Sir Thomas の権威から完全に解放されれば計画は全く楽しいものになると想像しているが、リハーサルが進行していくにつれて各自が悩みを持ち始める。Sotherton のエピソードの二の舞いである。Fanny はまた静かな聞き役にまわり、Tom がいくら勧めても芝居に参加しない。Norris 夫人まで機嫌を損ねてしまふ。

'Do not urge her, madam,' said Edmund. . .

'I am not going to urge her,' — replied Mrs Norris sharply 'but I should think her a very obstinate, ungrateful girl, if she does not do what her aunt and cousins wish her — very ungrateful indeed, considering who and what she is.' (Ch. 15)

遊びにまで居候の身分を考えろと言われたの

ではたまったものではないが、Norris 夫人の迎合的な性格が生き生きと伝わって来る。後になって Fanny が Sir Thomas から Henry との結婚をしつこく勧められ、自分にはとても出来ないことだと言っただと断ると、'ungratefulness' (恩知らず) だと非難される場面がある。それと考え合わせると、Fanny の拒絶の中で 'manners' の二つの相反する解釈がぶつかりあっていることが思いあたる。

Edmund はリハーサルに参加することによって承知して、Fanny に手伝ってくれと云ってくる。Fanny ははじめ自分の振舞いを反省したりしているが、もっと深い憂慮で心がいっぱいになる。(第16章) つまり Mary に対する嫉妬心がはじめて頭をもたげたのである。

Fanny は他の登場人物たちとはかなり異っている。彼女ははにかみ屋だし、美人でもない。人中でゆったり落ち着いてもいないし、とって活発でもないし、話し上手でもない。

(Austen の小説ではヒロインが口数が少ないのは珍しい)。他の人たちが元気いっぱいであるのに Fanny はいつも疲れてしまう。暑い日に薔薇の花を摘めば消耗してしまうし、舞踏会では早々とひき上げてしまう。とりわけ彼女は Mary Crawford と正反対なのである。Mary とは反対に Fanny には機知が全然ない。また乗馬に対する態度も 2 人は対照的である。Edmund は

She(Mary) rides only for pleasure ; says Edmund to Fanny, 'you for health.'

と言っているが、この 'pleasure' と 'health' という 2 語が Mary と Fanny の特徴を適切に表現している。Fanny はつましい性格であることも才気煥発な Mary とは正反対である。Mansfield Park の読者が直感的に Fanny を好きになることはまずあるまいと思われる。しかし彼女の個性が、どこから見てもヒロインにふさわしくないところがえって興味深

い。Fanny Price について重要な点は彼女がいざという時になると服従しないということである。彼女は弱々しく見えるが世の中の重圧を克服していく逞しさを持っている。他の登場人物の利発さに比べれば、彼女は利発とはいえない。彼女の知性は道徳的知性とも言うべきもので、これが実は真の自由を勝ち取る能力なのである。

Edmund は父 Sir Thomas が Fanny を Henry に嫁がせたいことがわかると、その問題については、すっかり父の側についてしまう。Fanny が自分と Henry とは全く共通点がないと主張すると Edmund は「君たちは結構似通っているよ。趣味も共通なものがあるし、道徳についての考え方や文学的趣味も結構似通っている。」と言って Fanny を説得しようと試みる。(第35章) Henry との結婚に対する拒絶については Fanny は全く四面楚歌の状態である。

Sir Thomas の突然の帰国は子供たちにとってまさに青天の霹靂であった。

Every other heart was sinking under some degree of self-condemnation or undefined alarm, every other heart was suggesting 'What will become of us ? what is to be done now ?' It was a terrible pause ; and terrible to every ear were the corroborating sounds of opening doors and passing footsteps. (Ch. 19) いく分誇張されているし、親が久し振りに帰宅したというより、神が審判を下しに近づいて来たというような受取り方も出来そうである。

Sir Thomas は英国の地方の紳士の正統な道義といったものを象徴している。Austen は彼をまず正当なもの、儀式ばったもの、そして善なるものを断固として守護するものとして描いた。しかし小説の進行に伴って、彼の立て前の根本的な限界、子供たちのための教育計画の欠陥、無分別で強引な道義、家族

の失敗に対する責任, Mansfield の全てを守って行こうとする試みの失敗などが次々と読者の注意を引きつける。Sir Thomas は Mansfield Park のふさわしい守護者とは言えないという結論になる。

第17章で Mrs. Grant (Mary の姉) が描写しているところによると Sir Thomas は

'He has a fine dignified manner, which suits the head of such a house, and keeps every body in their place' (Ch. 17)

紋切型の賛辞は善意のものではあろうが、読者には Sir Thomas が単に子供たちの悪い行儀の躰をするばかりでなく、子供たちとの間の自由な心の触れあい、自由な考えの交換（これが真の教育及び徳育の源たるべきものである）をも抑制してしまっていることが感じられる。また、帰宅した Sir Thomas は見出せる限りの 'Lover's Vows' の台本を焼き捨てさせ、芝居の設備の取り壊しを命ずる。Mr. Yates を邸から追い出し Grant 家の人々（Crawford 兄妹もその一員である）の訪問にも良い顔をしない。彼は留守の間の 'Lover's Vows' 上演の企てに、Fanny がどんなに気をもんだかには全く気付かない。しかし、しばらく見ないうちに Fanny の容姿が美しくなったことには気が付く。(Your Uncle thinks you are very pretty ch. 21). うわべのことに気付いても Fanny の心の問題（いや増して来る彼女の美しさに象徴されるように、この小説の中でもひそかにふくれ上って来てるのだが）にはまるで盲目である。

Sir Thomas は Maria の婚約者である Mr. Rushworth が経済的条件の他は、何の取り柄もない若者であることに気が付き、Maria にもう一度確める（第21章）が彼女は大丈夫だと答える。Austen が手紙の中で

'anything is to be preferred or endured rather than marrying without affection.'²⁰⁾

と言っていることを考え合わせると、Sir

Thomas は自分の長女の悲惨な結婚によって審判をうけたことになる。父の留守の間に味わった束の間の開放感に味をしめた Maria が「是非、父と Mansfield から逃れなくては」と感じたからである。

第22章は

'Fanny's consequence increased on the departure of her cousins'

という文で始まる。Fanny の重要性の増大は先ず、彼女が Crawford 家の人から食事に招待されることで明らかになる。生まれて初めて招待をうけて、Fanny は驚きのあまり、どうしてよいかわからない。Norris 夫人は立腹する。身の程知らずだというのである。そして決して出しゃばってはならないと、またお説教をつけ加える。

'The nonsense and folly of people's stepping out of their rank and trying to appear above themselves, makes me think it right to give you a hint, Fanny, now that you are going into company without any of us; and I do beseech and intreat you not to be putting yourself forward, and talking and giving your opinion as if you were one of your cousins — as if you were dear Mrs. Rushworth or Julia. That will never do, believe me. Remember, wherever you are, you must be the lowest and last... ' (Ch.23)

この言葉の中に含まれた皮肉は、第一章の Sir Thomas の Fanny 教育に関する方針演説に含まれた皮肉と相通ずるものがある。この小説全体の進展方向が示唆されているのが感じられる。('The last shall be first' という寓喩があるのをちらりと思いつくのは筆者ばかりではあるまい) この15行ぐらい後で Sir Thomas がドアを開けながら「Fanny、何時に馬車を来させたらいいかね」と言った時、Fanny は驚きのあまり口がきけないほどである。Fanny はその晩餐会に Sir Thomas が作

らせてくれた新しい白い服を着て出かける。Henry Crawford は食事をとりながら、素人芝居の計画が中止になってしまったことを残念がり、もし風をコントロールすることが出来たら Sir Thomas の帰国を一週間遅らせることが出来たかもしれないと言う。これに対して Fanny は自分は一日だって伯父の帰りを遅らせたいなどとは思わなかったと今までにない強い口調で頬を紅潮させながら答える。

第24章では Henry は Fanny を全くきれいだ (absolutely petty) と思う。24章というのはこの小説のまん中あたりである。このあたりへ来るともう Fanny はただの居候の身分からすっかり抜け出して皆から受け入れられるようになり、結構賞賛されるようになって来ている。読者は Fanny が自分が正しいと思うことを言ったり行なったりする時の大胆不敵さをすでに垣間見ているわけである。

小説の後半は Henry Crawford が Fanny に自分を愛させたいと思うところから始まる。その結果 Henry は本気で Fanny と結婚したいと思いはじめる。妹の Mary は兄の戯れの恋を止めようともしない。ところが Crawford 兄弟には思いもよらないことだったが、Fanny は Edmund を愛しはじめて居り、(このことは読者はすでに第16章で Fanny の嫉妬心によって知らされている。) そのおかげで Henry の毒牙から逃れることが出来たわけである。Austen は Fanny への圧力を低く評価してもいいし、Fanny を現実ばなれのした感心なヒロインに描こうともしていない。Fanny が習慣的で社会的な経済的重圧に負けてしまわないのは Edmund への愛があったればこそである。Henry Crawford は妹と同様にいろいろ魅力的な資質に恵まれている。遊び歩くし浮気でもあるが、彼の態度はきびきびして好感が持てる。Austen 自身も手紙の中で 'a clever pleasant man' と言っている²¹⁾。

第25章のはじめに Sir Thomas は Henry が Fanny に気があることに気付き、第26章のはじめには、Mansfield Park で舞踏会を催すことに決める。Fanny のはじめての舞踏会である。

'Miss Price, known only by name to half the people invited, was now to make her first appearance.' (Ch. 32)

いよいよ Fanny のデビューである。彼女と Henry が舞踏会の“皮切り”をする。Fanny のこの中心的な立場は彼女がこの小説の中心人物にやっとなったこと、又他の人々の眼にも彼女の重要性がはっきりして来たことを示唆していると見てよかるう。

Sir Thomas は Fanny に Henry との結婚を承諾させようと思ひ、彼女の部屋 (East Room) へやって来る。Sir Thomas が彼女の部屋を訪れたのは数年振りであったので Fanny は驚く。その日は寒い日で Sir Thomas は Fanny の部屋に火の気がないこと、Norris 夫人が以前から火を焚くことを禁じていたことを知って驚く。散歩に出ていた Fanny は帰って来てみると部屋には火が燃えていた。

... a fire lighted and burning. A fire ! it seemed too much ; just at that time to be giving her such an indulgence, was exciting even painful gratitude. She wondered that Sir Thomas could have leisure to think of such a trifle again ; but she soon found, from the voluntary information of the house-maid who came to attend it, that so it was to be every day. Sir Thomas had given orders for it. (Ch. 32)

このちょっとした出来事は Sir Thomas の思慮深さを示してはいるが、この親切のために Fanny は彼に勤められる Henry との縁談を断ることが余計に難かしくなってしまう。

階下で Henry が待っているからと色よい

返事をせかされて、Fanny は不承知の旨を伝えると

'I do not catch your meaning,' said Sir Thomas, sitting down again. 'Out of your power to return his good opinion! What is all this? I know he spoke to you yesterday, and (as far as I understand) received as much encouragement to proceed as a well-judging young woman could permit herself to give. I was very much pleased with what I collected to have been your behaviour on the occasion; it showed a discretion highly to be commended. But now, when he has made his overtures so properly, and honourably — what are your scruples *now*?'

'You are mistaken, sir,' — cried Fanny, forced by the anxiety of the moment even to tell her uncle that he was wrong, — 'you are quite mistaken. How could Mr. Crawford say such a thing? I gave him no encouragement yesterday. On the contrary, I told him — that I would not listen to him, that it was very unpleasant to me in every respect, and that I begged him never to talk to me in that manner again. I am sure I said as much as that and more; and I should have said still more, if I had been quite certain of his meaning anything seriously; but I did not like to be — I could not bear to be — imputing more than might be intended. I thought it might all pass for nothing with *him*.'

She could say no more; her breath was almost gone.

'Am I to understand,' said Sir Thomas, after a few moments' silence, 'That you mean to *refuse* Mr. Crawford?'

'Yes, sir.'

'Refuse him?'

'Yes, sir.'

'Refuse Mr. Crawford! Upon what plea? For what reason?'

'I — I cannot like him, sir, well enough to marry him.' (Ch.32)

Fanny は口ごもっているし、言葉の選択も上手ではないが、そのためかえて実感があり、この小説の中心的シーンとしてふさわしい。

Sir Thomas は Henry が願ってもない良い相手であり、兄 Willam の昇進も彼のおかげであったことも説きかせる。しかし Fanny は聞き入れようとしない。数分前のやさしさとはうって変わった冷たい厳しさ (cold sternness) で Sir Thomas は Fanny にもう話しても無駄であること、彼女がそんなにわがままとは思ってもいなかったこと、自分のことだけを考えて (Portsmouth の) 家族のことなど忘れていたのであろうということ、こんな良い縁談は二度と起るまいということ諄々と説いてきかせる。Sir Thomas の言葉にはこの先起ろうとする事の裏付けとなりそうな皮肉も含まれている。

'I had thought you peculiarly free from wilfulness of temper, self-conceit, and every tendency to that *independence of spirit*, which prevails so much in modern days, even in young women, and which in young women is offensive and disgusting beyond all common offence.'

この 'independence of spirit' を Sir Thomas は何も気付かずに使っているが、読者はそれを Mary Crawford や Bertram 家の娘たちに見て来ている。彼女たちの「独立」とは、環境と教育 (これも誤りだらけ) の制約を受けているため現実とはかけ離れたものである。Mary は Edmund と結婚すれば必然的に払うことになる犠牲を払う勇気がないので、結婚にふみ切れずにいる。Maria は憤慨した結果 Rushworth 氏と結婚するが、その後虚栄と肉

欲にかられて Henry と駆け落ちする。Julia は利己的な恐怖から Yates 氏と結婚する。実際は Fanny だけがこの 'independence of spirit' を持ち合わせているわけである。そのため Sir Thomas がそれを嫌い、彼女の自由の(消極的な)表現にうんざりしたのも無理がないし、また非常に皮肉でもある。Fanny が実際には持ってもいない欠点について Sir Thomas に厳しく叱られる一節には、彼の道義に対する無理解がさらけ出されている。Sir Thomas にとって、結婚とはただ自分にふさわしく、人に恥ずかしくない身のかため方にすぎない。彼の Fanny へのお説教の論拠は *Sense and Sensibility* の Mrs. Ferrars が Edward に Lucy との婚約を破棄して裕福な Miss Morton と結婚させようとする時のこととよく似通っている。

Austen はヒロイン達の恋愛結婚の構想を練る時、18世紀の作家としては少々変り種だったようである。J. M. S. Tompkin によれば

Marriage for an establishment is respectable especially when it obliges one's family : it is foolish, even in a sense presumptuous to refuse an 'unexceptionable' man because he does not happen to inspire one with a romantic degree of attachment, and a parent is justified in putting some pressure on his child to incline her to consider her own interest.²²⁾

であった。これは Sir Thomas の立場と同一である。彼は Fanny への説教の中で 'You think only of yourself' と言っているが、結婚については自分のことだけを考えるのが当然であって、現代の考えからすれば Fanny が正しい。2～3頁先に Norris 夫人が Sir Thomas に Fanny についての意見を述べる一節がある。「Fanny は物事をこっそり独りでやるくせがある」と表現は異なるが、Sir Thomas と同様な非難をあげている。この

ことから Norris 夫人は Sir Thomas と同じ人生観の持主であることがわかる。わがままで恩知らずだという伯父の怒りは Fanny をひどく苦しめ、今までにないほどみじめになる。それでも Fanny は Henry との縁談を承知しようとはしない。

ここでこの小説の中の三つの世界、すなわち Portsmouth, London, Mansfield Park について考えてみたい。London は華やかな恋愛と根無し草の世界であり、Portsmouth は生活苦の世界、Mansfield Park は一種の砦である。そしてこの三つの世界はいわば当時の英国社会の展望図であると言えなくもない。Fanny は London についての話を聴くのが嫌いである。Portsmouth の母の生活のさもしさにあきれる。そして Mansfield Park に自分の落ち着ける場所を見出す。しかし Mansfield Park は存在し得る最高の世界といえるわけではない。Mansfield Park は一つの生活の方法としては不完全であり、その中に住んでいる人々は思い上っている割にはその地位に不適任である。Fanny に出来る唯一の選択の自由は、この三つの世界を三つとも拒否して自分の信ずるただ一つのもの価値を主張することである。つまりどんな社会的経済的重圧とも関係のない愛の価値をである。

第37章で Sir Thomas は Fanny を故郷の Portsmouth へ里帰りさせることにする。彼の第一の動機は、美しく成長した娘を親達に見せてやることでなく、Fanny を幸福にしてやるためでもなかった。彼の目的は現在 Fanny が当然のこととして受けている快適な生活と楽しみをもっと有難いと思うようにさせることであり、Portsmouth の貧しい生活に直面すれば彼女が Henry の結婚申込みをもっと高く評価するようになるだろうと確信している。

It was a medicinal project upon his niece's understanding, which he must consider as at

present diseased. A residence of eight or nine years in the abode of wealth and plenty had a little disordered her powers of comparing and judging. Her father's house would, in all probability, teach her the value of a good income; and he trusted that she would be the wiser and happier woman, all her life, for the experiment he had devised. (Ch. 37)

Sir Thomas が Fanny の心が病んでいると考え得るという事実そのものがこの人物についての Austen の最も辛辣な批評であり、Mansfield 独特の(本末転倒の)道徳観の表示であるとも言える。

Portsmouth へ帰った Fanny が知った第一のことは「充分な収入というものの価値」であった。Sir Thomas の計画は功を奏したのだ。もし彼女がすでに Edmund を愛しはじめていなければ、おそらく Henry Crawford と結婚することになっただろう。Fanny を救うのは Edmund への愛である。金銭、社会的地位、慣習的な規準からの逃避は愛情(これは必ずしも恋愛感情でなくても可能だと考えられる)のおかげに頼ることによってのみ可能である。Portsmouth のシーンは Austen がこの小説の始めからずっと言いたいと思って来たことを総まとめとしての価値がある。

Portsmouth のエピソードは第38章に始まり Fanny の意識を通してすべてが語られる。Sotherton におけるのと同様に彼女はいわば台風の目のような存在でいよいよ激しく変化していく(物語の)世界の中心にある静かな点のようなものである。重要な事件はすべて Portsmouth 以外の土地で起るので、読者にはひどく遠いもの感じられ、Fanny だけがリアルに見えて来る。読者の視線は徐々に Fanny に焦点が合っ来てしまう。

Fanny は懐かしの我が家についてもほんの2~3分でショックと失望が始まってしまふ。

家中が混乱と騒音に満ちており誰も Fanny に注意を払うものはいない。Fanny は自分の身の置き所がないことを感じる。彼女の到着の時に食事の用意もされていない。(出発する時も食事は出ない。)第46章で Austen が皮肉を交じえて

'Fanny's last meal in her father's house was in character with her first; she was dismissed from it as hospitably as she had been welcomed.'

と書いている。

Portsmouth の生家は手狭であり Fanny は Mansfield の良さがわかって来る。

No, in her uncle's house there would have been a consideration of times and seasons, a regulation of subject, a propriety, an attention towards every body which there was not here. (Ch. 38)

生家は Fanny が望んでいたこととは正反対のものだった。騒音と無秩序と下品さの巢窟であり、彼女は自分の両親を尊敬したいと思っていたのに出来ない。母はえこひいきでだらしく、時間を浪費し、子供達に何ひとつ教えようともしない。弟妹たちは何の話し合いもせず、何の才能もなく、Fanny への愛情もなく、Fanny をもっとよく知ろうともせず、仲よくなろうともしない。

第41章で Henry Crawford が Fanny を生家に訪問したあとで彼女の感情にははげしい恥ずかしさが加わる。

Fanny は Mansfield Park が自分の家なのだと思ひ始める。

When she had been coming to portsmouth, she had loved to call it her home, had been fond of saying that she was going home; the word had been very dear to her; and so it still was, but must be applied to Mansfield. That was now the home. Portsmouth was Portsmouth; Mansfield was home. (Ch. 45)

沈みきっている Fanny に Mary Crawford から手紙が来る。Mansfield Park の楽しい思い出が甦って Fanny はなつかしい思いでいっぱいになる。そしていっそう Henry Crawford に心が傾く。

Portsmouth へ Fanny を訪ねて来た Henry は

'altogether improved since she had seen him. . . she had never seen him so agreeable — so near being agreeable' (Ch. 41)

非常に感じのよい青年に変身してしまったように Fanny には思える。'near' という語は彼女が Henry についての考えを如何に急速に変えてしまったかを自覚したことを示している。

Portsmouth のシーンはどれも環境の力が人間の性格を形成し、変化させていく有様を如実に表現している。

第40章では Fanny が circulating library (巡回図書館とか貸出し文庫とか訳している) に加入する。そして何も読んだことのない妹の Susan に伝記文学と詩の趣味を植付けようと努力する。(これはかつて Fanny 自身が楽しみを見出したものだった。) Susan に対する Fanny の愛情と一人前扱いは文盲に近かった Susan を目ざめさせ、その徳育も始まる。このおかげで Susan は小説の終りの頃には Mansfield Park で Fanny の代りとして役に立つ人間にまで成長する。Susan の教育に没頭することによって Fanny 自身も Portsmouth と Mansfield という環境の影響をあまり受けずに過すことが出来るようになる。

Fanny が Mansfield に到着したばかりの頃、Edmund が屋根裏部屋に通ずる階段の上で泣いている Fanny を見つけて親切に話しかけ、慰めたり教えたりしたことがあった。(第2章) 一般に人に関心を持つことは愛情を促進するものである。愛情は教育の重要な基盤で

ある。Fanny が Henry を拒絶することが出来るのは主として Edmund への愛情のためである。また、妹 Susan への Fanny への影響は (Edmund の Fanny への影響と同様に) ごく単純な親切な行為から発している。銀のナイフが Susan とその妹の Betsey との口論の原因であることに気が付き、Fanny は新しいナイフを Susan に買ってやり、その所有権を与えてやり、2人の妹たちに仲直りをさせる。Henry Crawford は Fanny を本当に愛している。(Austen は読者に彼の感情の真偽の程を疑がう理由を与えてはいない)。Fanny と同様に、読者は徐々に Henry を好ましく思うようになり、彼の突然の面目失墜 (Maria との駆け落ち) を知って幻滅する。

共に London で育った妹の Mary にとっては、ほんの喜劇で終わってしまうような不行跡が Henry を損なってしまっていて、Fanny に真の愛情を感じてももう遅すぎるのである。もう2～3年 Fanny の帰宅が遅かったら Susan も環境の犠牲になってしまっていて救いようがなかったかもしれない。

Mary Crawford は兄のような運命にはならない。彼女も Edmund に恋をしているが、少ない収入の田舎牧師の妻になるような結婚は受け入れることが出来ないのである。Edmund の愛情は欲しいのだが結婚したいとは思わない。そこで彼女は Edmund を褒めたり貶したりして気紛れさを発揮し、Edmund をはらはらさせる。Mary と Edmund のラストシーンでは London 世界の価値判断と彼女の Edmund への感情とが激しく衝突するのが感じられる。彼女は兄 Henry に腹を立てている。しかし Fanny を褒める時にも「なんで Henry をしっかり捉まえておかなかったのか」と彼女をせめる。

'Why would not she have him? It is all her fault. Simple girl! I shall never forgive her. Had she accepted him as she ought. they

might now have been on the point of marriage. . . ' (Ch. 47)

いったんついてしまった習慣は、もう食い止められないものであろうか。Maryの場合たった一度だけ習慣に逆らった行動が見られる。第29章で Edmund が Mansfield を去った時、Mary はだんだん Edmund が恋しくなり、自分で彼への愛情を認めざるをえない。しかしやがて彼女は自分を責め始める。もう少しで彼女は Edmund への愛情のおかげで「教育」され、自分自身やまわりの人々を明確に判断することが出来るようになれるところだったのだが、矢張りもう遅すぎたのだ。彼女の幼ない頃の教育が「手綱さげても」式結婚に飛び込むことを不可能にできてしまっていたのだろう。

第46章の終りに Fanny は迎えに来た Edmund に連れられて Mansfield Park へ帰る。Mansfield への Fanny の2度目の到着（大げさに言ってよければ凱旋）である。はじめて到着した時のことを思い出してみよう。

Afraid of every body, ashamed of herself, and longing for the home she had left, she knew not how to look up, and could scarcely speak to be heard, or without crying. (Ch. 2) しかし今度は彼女は望まれて帰って来たのだ。彼女は役に立つし、愛され、頼りにされていた。Bertram 夫人は 'Dear Fanny! now I shall be comfortable' と行って Fanny の首に抱きつく。Sir Thomas は（今では *Poor Sir Thomas* である）親としての自分の行ないの誤ちに気付いていた。

終章の第48章は Sir Thomas の苦悩と罪（ちょっと大げさな表現だが）について明らかにし、また彼の「悟り」も言及されている。この「悟り」なしには Sir Thomas は救いようがないからであろう。彼は自分があまりにも体面にこだわり、厳めし過ぎたために子供たちとの自由な会話、気持の通じ合いを抑制

してしまっていたことによりやく気が付く。

'Fanny was indeed the daughter that he wanted.' という箇所を読む時、我々は「そう来なくては」という思いに駆られる。Fanny を Edmund の嫁として心から受け入れることがすなわち Sir Thomas の「再教育」の最終段階なのである。そしてこのことは相互の愛情によって可能であることは疑いがない。

Note

- 1) Margaret Llewelyn : *Jane Austen* (William Kimber & Co. Ltd, London, 1977)
- 2) *Emma* p. 21 Jane Austen の作品はすべて *The Oxford Illustrated Jane Austen* による
- 3) *Minor Works* p. 138.
- 4) *Emma* p. 21.
- 5) *Mansfield Park* p. 18.
- 6) *Mansfield Park* p. 19.
- 7) *Minor Works* p. 198.
- 8) *Northanger Abbey* p. 110.
- 9) *Persuasion* p. 155.
- 10) Richard Hooker : *Of The Laws of Ecclesiastical Polity* (Oxford U. P. 1850) Book I. Ch. 4-(5)
- 11) John Locke : *Some Thoughts Concerning Education* (5th ed. 1705), ed. James L. Axtell (Cambridge, 1968) Sect. 70.
- 12) D. D. Devlin ; *Jane Austen and Education* (London, Macmillan Press. 1975) p. 18
- 13) *Northanger Abbey* (ch. 25).
- 14) *Pride and Prejudice* (ch. 36)
- 15) Devlin p. 5.
- 16) *Mansfield Park* ch. 48.
- 17) B. C. Southam : *Sanditon : The Seventh Novel* p. 2
- 18) George G. Williams : *Guide to Literary London* (B. T. Batsford Ltd. London 1975)
- 19) Edmund Wilson : *Classics and Commercials* (London, 1951) p. 200.
- 20) Jane Austen, *Letters*, ed. R. W. Chapman, 2nd ed. (London, 1952) p. 410.
- 21) *Letters* p. 378.
- 22) J. M. S. Tompkins, *The Popular Novel in England 1770-1800* (London, 1932) p. 102.